
天下夢争

ヌマッチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天下夢争

【Nコード】

N5225F

【作者名】

ヌマツチ

【あらすじ】

ごく普通の美少女^{あかしやおか}赤謝崗はある日車に跳ねられてしまう、そして彼女はあるものを目撃し彼女の日常が変わり始めた。

第一話 「歪み始めた日常」

それは家への帰り道での出来事。いつもどろりの帰り道、いつもどろりの友達と別れてからいつも通る道を抜けて交差点で止まる。交差点の信号が青になるのを待ちながら今日の夕食を考える。

「今日はカレーにしようか」

妹の喜ぶ顔を思いながら青になった信号を渡る。すると、

キキイイー

ガシャン

ドシャ

わけが分からなかった。目の前には何かがいた、その何かは私を天国へ連れて行く天使でもなければ地獄へ連れて行く悪魔でもない、血に餓えた目とワニの様な口をした狼の頭のゴリラや熊の様な体の怪物。

それは真っ直ぐ私に襲い掛かろうとする、私は逃げようとするが痛みと恐怖で動く事も叫ぶ事も出来ない。もう駄目だと思い目を閉じたその時、停止した時間が再び動きだした様な感覚を感じた。恐る恐る目を開けると目の前には男の人がいた。その人が前に手を出すとその怪物は煙の様に消えた。

その人が私の方を向き目が合う、その人は驚いた様子を私を見つめ

「…お…見え…」か…」時間が完全に戻った感覚と共に私の意識はそこで途切れた。

気が付くと私は嗅ぎ慣れた匂いの中ベッドで横になっていた。

「ここは…病院？」

そうだここは星峪病院、昔から身体の弱い私はいつもこの病院にお世話になっていたんだ、それにしてもなんで私はここに?…そう

だ思い出した、今でもはつきりと覚えている正体不明の怪物と男の人、思い出しただけで恐ろしい。はあ、嫌なものを思い出してしまった気持ち悪い。あれは一体なんだったのだろう。そう考えている内に部屋のドアが開いた。

「お姉ちゃん！！！」

「鈴、どうしたのこんな所に？」この子は赤謝あかしや 鈴八すずつ下の私の妹。

「どうしたのじゃないよ、お姉ちゃん車にはねられちゃったんだよ！ボケボケさんもいいかげんにしないと死んじゃうよ！あ、パパ、ママこっちこっち！」

そうだそういえば私、車に跳ねられたんだっけ、あの怪物の事ですっかり忘れてた。だけど、全然実感わかないな。なんでか分からないけど車に跳ねられたというよりあの怪物に襲われたっていう感覚しかない。

「大丈夫か岡おか、身体の方は無事だと医者から聞いたが具合は平気か？」

「大丈夫、何ともないよお父さん。」

「ホント、ビックリしたわよ。今まで病気で道に倒れたこともあったけど車に跳ねられたなんて初めてだったから心配で心配で寿命が十年縮んじやったわよ。」

「心配かけてごめんねお母さん、これから気を付けるね。」

「それにしてもお姉ちゃんこれで何回目？お姉ちゃんにか悪いのついてるんじゃないの？」

それを言っちゃうか、

「七回目よ、こんなのもうラッキーセブンならぬアンラッキーラッキーセブンじゃない、ああ、みんなにどんなにイジられることやら……はあ」

「それじゃあもう暗いし私達はそろそろ帰るわね。」

「うん、お休みなさい。」
ボタン

ちよっと今後が心配だけど嫌な事も忘れられて今日もぐっすり寝れ

そうだ、今なら分かる、あれはきっと幻、悪い夢だと。

……あれ、俺の出番は？

続け

第二話 「重なり会う歪み」

「なんだって、赤謝が車に跳ねられたって本当かよ！」

学校に来て早々、先生にとんでもないことを聞かされた。

「ああ、だがたいしたケガもなく明後日には学校に来れるそうだ。

お前達は赤謝と仲が良かったからまず最初に知らせてやりたかったんだ。」

キーンコーンカーンコーン

「おっともうこんな時間か、お前達席につきなさい。」

呆然と席に座っていると後ろから肩を叩かれる。

「ねえねえ軽、岡ちゃんって二重の意味で可哀想だよね。」

こいつは北条 ほつじょう 愛昔 あいからの幼なじみだ。

「二重の意味？」

「そうそうだってさ」

「赤謝は昨日車に……」

俺達の会話をよそに先生が赤謝の事故について話している。

車に跳ねられたってのにたったの2日しか休めないんだよ。」

「だよな、たしかに可哀想だけど明後日には来るんだから正確には今日1日しか休めないだぞ。」

「いちいち細かいわね。」

『えー』

今ごろ教室が騒がしくなる。

「ヤバイぞ、赤謝のやつ今度こそ本当に死んじゃうんじゃないわ。」

「ああ、赤謝さん、私はあなたのことをずっと忘れないわ。」

「あなた達何言ってるの、赤謝さんは明後日来るって先生が言ってたじゃない。」

「良いツツコミですな委員長、でも内心おかいけいのストッパーがいなくなってるんじゃないっすか？」

そうそう、俺、夕籍 たぜき 軽 けいと北条と赤謝のことをみんなは「おかいけ

い」と呼ぶ。

「そ、そんな事あるわけないでしょ、な、何言ってるの。」

「つーかなんで俺達が悪者扱いされなきゃいけないんだよ。」

俺達がいったい何をした、何も悪い事なんてして……

「えー軽、自分のやってる事分かってないのー」

「そうよ、だいたいあなたが……って北条さん、あなたが夕籍君をそそのかしてたのね！」

「違うって私は軽が楽しそうな事しようとするからそれについていっただけよ。」

「なんでそこで止めないのよ、だから赤謝さんが倒れたりするのよ。」

」

「いや、それ関係ないし。」

キーンコーンカーンコーン

「こらー授業を始めるぞ。」

「やべっ授業の用意してねえ。」

「あっ私も。」

「あなた達ホント赤謝さんがいなきゃダメなのね。」

キーンコーンカーンコーン

「んーやっと終わった、帰れるぞー。」

たいしたもんだ、あれだけさされたってのにピンピンしてやがる、ロクに昼寝出来てないのは同じだってのに。

「ほらほら帰るよ軽。」

「ヘイヘイ。」

学校の帰りで赤謝と一緒にいないのはこれが初めてではない。

あいつはしょっちゅう身体を壊したり無理をするから欠席する事が多く俺達にとってはよくある事だ。

「最近は事故が多いよね。」

「ん、ああ、そうだな。」

「いつ頃から増えだしたんだっけ？」

「そりゃアレだろ、特権生法が始まってからだろ。」

「ああそれそれ、フルでなんて言うんだっけ？」

「ええと、特別…権利…、やべっテストに出すって先生言ってたよな！」

「えっとそうだ！特別免許権利生徒法だ！」

「ああ思い出した、んで特権生法がなんだって？」

特別免許権利生徒法、通称「特権生法」それになると歳が足りなくても免許が取れる、つまり、18歳じゃなくても車の免許が取れたり、二十歳じゃなくても煙草が吸えたり出来るという滅茶苦茶でうらやましい法律だ。

しかし、それになるには東大級の学力が必要だとか、最近はこの話題で持ちきりでこの法律が始まってから特権生やそれと関係のある人達の事故が増えている。

「だって岡ちゃんは資格取ろうとしたけど落ちちゃったし他に特権生と関わる人はいないんだよ。」

「次の機会に資格を取るんじゃないかと思った野郎がいるんじゃないか？」

「それでもひどいよ。」

そう言っていると赤謝が事故にあった場所についた。

「花束でも置いてくか。」

「勝手に死んだことにしないの！もお。」

ん、なんだこの感覚は

「なんか変な感覚しないか？」

「ううん、しないけどどうかしたの？もうそろそろで信号赤になるけど。」

「いや、なんでもない。それより早くしないと赤にな……」

突然のことでわけが分からない、突然身体がいうことをきかなくな

ったのだ。

助けを求めようと北条に話そうとしてもしゃべれない、動けない。

「け、軽…た…助け…て」

俺達はそのまま車が行き交う交差点へゆっくりと一歩また一歩と近づいていく。

もう駄目だと思い目を閉じる

（そうか、これが死ぬ直前に時が止まるってやつか）

だがなかなか終わらない時の停止に苛立ちを感じ目を開ける。

「あ、ああ…あ…あ」

目の前にいるのはピエロの様な格好をしたゾンビだった。

それは両手から糸の様なもので俺達を引き寄せてくる、抵抗はしたもののそれは無意味だった。

「ヒヤハハハ、とつとと喰われちまいな、ヒヤハハハ」

そのゾンビのとてもない大きさの口が開く、

（もう駄目か）

「解限」

そう思った次の瞬間にゾンビの糸が切れ、抵抗してた勢いでしりもちをつく、

そして目の前に（同い年ぐらいであろう）青年がゾンビと向き会っていた。

「お遊びがすぎたか。」

そいつは俺達を向き少し驚いた。

「驚いたな、想像以上だ。」

「テメエ俺の餌に何しやがる！聞こえてるのかオラァ！」

「うるせえ、黙れ、消えろ。」

するとそのゾンビが真つ二つになり悲鳴を叫ぶ間もなく霧の様に消えて無くなった。

「な、ななな…な」

「ああ…あ…あ」

「おっともうこんな時間か、じゃあな、また明日。」

気がつく俺達は信号の前で腰をぬかしていた。
俺達はさっきの出来事を忘れるようにどうだっていい話を話し合った。するとさっきの事が嘘の様に忘れられた。

俺達の思ったとおり赤謝は散々みんなにいられていた。

「みんなひどいよー、どうしてちよつと休んだだけで死人扱いされるのー」

あ、あと委員長も

「委員ちよさーん、おかいけいのストッパーが戻ってきて良かったスねー」

「まあね、でも赤謝さんがいようがいまいが彼らが悪事を出来ることは私がいる限りないわ。」

「あれー委員長、それは赤謝さんに失礼なんじゃないですか。」

「あわわ、私なんてひどい事を」

「こらお前達、席につきなさい。」

教室が静かになるのを待ち先生がしゃべり始める

「突然だが珍しくこの高校に転校生が来た。」

『えーーーーー』

突然の重大発表に教室が一気に騒がしくなる。

静かになったところで先生が転校生を呼ぶ。

「入りなさい。」

「はい。」

ガラガラガラ

「どうも初めまして、田沼たぬま 風神かざかみです、以後よろしくお願いします。

」

『あーーーーー』

あ、あの人……

あいつは昨日の……
なんすか、コレ……

第二話 「重なり会う歪み」 (後書き)

ようやく、ようやく主人公を出せた、まさかこんなに時間がかかる
とは思ってなかったぞ。

第三話 「歪みの正体」

「ここか、刻羽大高校^{ときわだい}とは。」

刻羽大高校、いわゆるエスカレーター式の高校で少し、いや、かなり学力に差がある学校である。

なんせ幼稚園児の時に努力さえすれば高校受験をしなくてすむものだから、

だが高校受験がないということだから学校としての評価は偏差値50後半といった感じだ。

昔は栄光ある学校だったもののエスカレーター式になってからは生徒の学力が下がる傾向にあり、今では全生徒528人中、特権生が1人という（これでもかなり凄い）長所と大学受験成功率50%という短所を持つ学校になった。

「資料どうりだな。」

これは俺が気になったから調べた独自の情報だが、この高校に転校した者は絶対に受験失敗や就職失敗になると伝われ、今まで転校生で成功した生徒はいないんだとか、

俺の前に転校して来た生徒は4年前でその間転校生は誰もいないとのことで学校のブログでは言われ放題だった。

まったくなんて場所に居てくれちゃうんだか、また田沼の名に泥を塗ることになっちまったな。

まあグチはここまでにして真面目にかかるか、こればかりは奴らに先をこされるわけにはいかないからな。

もし先手を撃たれるような事があってみる、大真面目に大惨劇だ、それだけは勘弁して欲しいな。

まあ、逆にこっちに引っ張れたらかなりのものだ、一気に戦況がひっくり返る。こいつが第一目標だ第二目標は…まあ今はいいかすぐ分かることだしな。

「ん、まさか彼女は……」

なはは、まさか彼女が来ていたとはな、こんな所にも来るとは驚きだ。

「ようこそ刻羽大高校へ、副校長の鈴音 稟よ。」

場所は変わって1ーBの教室へ

「どうも初めまして、田沼 風神です、以後よろしくお願いします。」

『あーーーーーー』

「キヤーーステキーーー」

「ブーブー帰れ帰れ」

「男は消えろブーブー」

おー聞こえる聞こえる良いリアクションとその他もろもろ、

（さて、どう切り出そうか？ やっぱ周りを黙らすには＞アレ＜に限るか、そうと決れば）

俺はいかにも『僕、困ってます』的な目線で担任の富崎先生とみさきに助けを求めた。

「あー田沼君に質問のある奴、手を挙げろ。」

『ハーーーイ』

おうおういるね、これは黙らせがいがあるな。

ん、野郎の人数も多いな、こいつはまた珍しい事だな。

「田中」

『いけー特攻隊長、洗い浚い全部吐かせろ』

特攻隊長？ なんじゃそりゃ、どーゆー役割だよ！ つーか特攻で尋問っておかしくないか？

「なんでこの高校に来たんですかー？」

早いなーこの技使うとかなりの間気まずい空気になるから後半に使用いたかったんだけど仕方ないか、ここしかチャンスはなさそうだな。

「美少女が沢山いるからです。」

シューシューシュー

ほらね。

キンコンカンコンコン

（ようやく終わったか）

あの後俺はK-1並みの会話術（意味が分からない人はすみません）で程よくクラスに馴染み特別扱いされる事はあまりなかった。

さて、程よく馴染めたところで下校は自動的に帰り道が同じ彼女達になるだろう、

流石に一日目に一緒に帰るなんてフラグイベントを起こす奴はそうそういやしない。

（しかし助かったな）

彼女達がここをどこかも忘れてあの事を喋っちまったら彼女達だけでなく俺までもが変な目で見られちまう、俺は多籍 軽あたりがそれをやっちまうかと思ってたがその心配はなかった。

まあ、北条 愛がその話抜きで俺に話しかけてきた時は結構びびったけどな。

「田沼君、帰り道はどこなの？」

「桜門から駅に向かう道です。」

「だったら赤謝さん達と一緒に帰ったらどうかしら？」

「ありがとうございます西野さん、そうさせてもらいます。」

流石だなK-1会話術、最初はドン引きだった彼女も今では何気なく普通に会話出来る。ひぐらして勉強したかいがあるってもんだ。

「ねえ田沼一緒に帰らない？もちろん軽と岡ちゃんも一緒だよ。」

「分かりました、一緒に帰りましょう。しかし何故帰り道が同じ事を知っているのですか？」

「てへへ、盗み聞きしちゃった。あと、何度も言うけど同い年なんだからそんな堅っ苦しい言葉はなし、分かった？」

もちろんだこの俺が忘れるはずがない、こいつは単なる空気作りだ。北条 愛と話せても多籍 軽と赤謝 岡と会話出来なければあの事を彼女達に教える事が出来なくなりみすみす奴らにチャンスを与える事になる、

わざわざこの俺が出向いたんだ、必ずこちらに引き込んでみせるさ。

「おっと、俺としたことがすっかり忘れた、すまないな。」

俺が思ったとうり帰りは無言の状態が続いた。

三人は話そうとはするものの空気を讀んでかそれとも言いたい事はあるものの何から話せば分からないと言いたげな様子でこちらを伺う。

もちろんこちらは完全スルー、こんなところでそんな話をされたらたまらないのでこれを機会に例の場所へと迎う

「次左に曲がるぞ。」

「どこに行くんだ？」

「んーお前達の知りたい事を話せる唯一の場所、とでも言うておこうか。」

正直緊張していた。奴らからすれば最高の狩場でこちらはお荷物三人に+α、さらに援護なしときたんだから奴らは多少無茶をすればこちらを阻止出来たんだ。本当、奴らの馬鹿さに感謝感謝である。

『もってつけ♪』

「おう俺だ、……分かった、こっちもやっておくからすぐに進めてくれ、頼んだぞ。」

「もうすぐ着く、聞きたい事を三人でまとめておけ。」

「株式会社イージス？聞いた事ない会社だな。」

その会社は綺麗なガラス張りのそこそこ大きい会社だった。

「それで多籍君、どんな事から話せばいいのかな？」

「アドリブで良いじゃない、どうせああいうのは自分の話を一方的に押し付けるだけなんだろうしね。」

「そうなの多籍君？」

「北条が言うからにはそうなんじゃないか、多分。」

あいつは俺達の少し前を歩いているから俺達の会話は聞こえてない。だが、聞きたい事は山ほどあるんだ、話がスムーズにいくとは思えないからあいつはきっと色々な方法で俺達の会話を盗み聞きしてると思う。

俺は個人的にあいつが嫌いだから北条の言う通りわざと話を決めないであいつを困らせたかった。しかし

「それでもやっぱり話す事を決めとかなないと話が進まなかったりするから決めようよ。」
「やっぱりな。」

「アハハ、岡ちゃんならそう言うと思ってたよ。」

「まったく真面目だよな赤謝は。」

これがいつもの俺達のパターンだ。

真新しい建物の中に入る、

あいつは偉いやつみたいでヤクザの手下のようなおっかないオッサ

ンがズラリと出迎えていた。

「お帰りなさいませ田沼様、お連れの方は」

「ああ、例の特別客だ、あの部屋へ案内してやれ。」

「承知しました。」

「こいつらがお前達を案内する、部屋で少し待ってくれ。」

「：でね、あの子ったらそれで泣きだしちゃってね。」

「マジかよ！それはやりすぎだろ。」

「でもその子だって悪いよ、もっと相手の事を考えなきゃ。」

「うっわ冷た、赤謝って思ったより冷たいよな。」

「そ、そんな事ないよ」

「クールな岡ちゃんも良いけどやっぱ困った岡ちゃんの方がもっと可愛い」

綺麗な個室に連れてこられたものの待ってるのも暇だから北条達と話していたのだが今までの緊張感はすっかり抜けてしまった。

コンコン

「失礼するぞ、おやおや、ずいぶんと面白そうですね。」

「まーねー」

「本題に入ってもいいかな？」

場に今までの緊張感が漂う

「まず君達の聞きたい事は？」

「はい」

「どうぞ、北条さん。」

「私達を襲ったあの怪物はなんなんですか」

「それよりお前達は何者なんだ？教えろよ。」

「はいはい分かったよ、とりあえず二つ同時に話すよ。」

「お前らを襲った怪物は「アシッド」と言うんだ、漢字で書けば「悪影」だな、奴らがお前達を襲ったのはお前達の「存在力」を奪う

ためだ。奴らは人の存在力を糧とし、成長し、進化する。」

「それじゃその存在力を全て奪われてしまったらどうになってしまうのですか？」

「良い質問だ、存在力を全て奪われた者はその日の内に様々な形で……死亡する。事故や殺人事件の被害者、心臓麻痺、なんでもありだ。」

「！！！」

「え……………」

「お、おい」

「だがそれだけじゃない、素質のある強力なアシッドは存在力を全て食らい尽くすと対象の存在を完全に消滅させる、つまり、消滅させられた者は「この世に居なかった」という事につまり「この世に産まれなかった」という事になる。」

「おいちよつと待てよ、わけ分かんねえよ！何言ってるんだよ！」

「まあ、そうなるだろうな、休憩するか？」

「いいえ、続けて下さい。」

「フ、理解が速くて助かるよ、二つ目の質問、俺は何者か、だ。」

「おい！人の話を…」

「落ち着いて軽、まずは田沼の話を聞こうよ、」

「…では話すぞ、面倒だから一発で聞き取ってくれ。俺は平行世界神族代理管理者、通称「平界者」の戦士だ。我々はこの世界のアシッドを戦滅し、悪魔神サタンの片割れ悪影神ルシファーの力を最高神ゼウスに渡し、悪影及び悪魔を全ての世界から消し去る事が目的である。なにか質問は？出来れば一つづつゆっくりと頼む。」

「わけ分かんねえよ、もっと分かりやす……………」

「特権生法との関係は？」

「今こちらで調査中だ。」

「おい赤謝、お前は黙っ……………」

「多籍君静かにして！！」

「！あ、ああ」

「私の祖父が死んだ事と関係あるのですか？」

「岡ちゃん……」

「鋭いとは困ったものだ、相手が鋭いと大体は困ったことになる。

……ああ、あなたの祖父、赤謝 一馬を亡き者にしたのはアシッドだ。」

第三話 「歪みの正体」 (後書き)

速く速くと思って作ったけど、やっぱり時間がかかるものですね。
今回はいつもより長く作ってみました、中途半端に次が気になる内容に仕上げたので気になったら次話も読んで下さい。

第四話 「歪みシリーズはここ

までつつーことで」(前書き)

プロローグ的な部分も終わりこれからが本編です。出来る限りスピーディーに進めるよう努力して1人でも多くの方にこの小説の良さを分かっていたきたいと思います。

第四話 「歪みシリーズはここ

までつつーことで」

「あなたの祖父、赤謝 一馬^{かずま}を亡き者にしたのはアシッドだ。」

.....

「やっぱりそうでしたか、前からおかしいと思ってたんです。」

「おい、なんでそんなあっさり」

「仇を…仇を射たせて下さい！どうしたら仇を討てるのですか！」

「おい赤謝、なに信じ込んでんだよ！こんなの嘘だって誰にだって分かるだろうが！！」

「あれだけのものを間近に見てなぜ嘘だと思えるのだ？分からんな。」

「んなの決ってるだろうが！どーせ金のかかるマジックで俺達を騙してたんだろ！！んなつまらねー話聞いてられっかよ！」

「どこへ行く」

「帰るに決ってるだろうが！バツカじゃねーの？」

「ちょっと軽え」

「バタンッ！！！！」

「追っていいぞ。」

「え？」

「どうもここまで理解されないとは思ってなかった、話の続きはまた後日にしよう。話は三人揃わないと意味がないからどうしても話を続けたいのなら多籍を連れ戻してからだ赤謝さん。」

「……分かりました。」

「失礼だが俺は一応忙しい身だからそうと決ったら早速帰ってくれないか？」

「バタン

うるさかった部屋も静かになる。

「さて、そろそろかな、」

昔の刑事ものの様に部屋（窓）から外を覗く。

「えーとなになにに、『なににあいつ、わけ分からない事ばっか言ってる！ ホント腹立つ！ なーにが『あなたの祖父を殺したのはアシッドだ。』よ、口から出任せもいいトコよ。あんな奴の言うことなんて信じちゃだめよ岡ちゃん。』か、」

一応口を読んでみたが思った通りかなりの嫌われようだった。

だがそれにしても赤謝さんはなんつーかよく俺の言うことなんて信じるな、別に嘘を吐いたわけじゃないが普通なら嘘だと思うのが一般的だ。

それが彼女の場合首を縦に振ってはいるものの、心と顔は『信じてい！ 復讐したい！』と語っている。

ん、この気は……

「シャドーか、」

「連絡するものがいくつかある、どうする？」

「まずは結界を解いたか？」

「ああ、ついさっき小さな集団が先に出てった坊主に近づいてるとの報告があった。」

「他にはあるか？」

「集会の集合命令が下った。」

「『奴』は来るのか？」

「俺が『アイツ』の来る集会に誘ったことがあれ以来にあるか……？」

「フ：そうだったな、時間は？」

「二時間後ぐらいに来てくれ、と言われた。」

「了解、んじゃ俺は向こうをやっとくからお前は別の場所で狩ってくれ。」

「分かった。へまふむなよ……。」

「俺を誰だと思ってる！ 馬鹿も休み休み言うんだな。」

「馬鹿で悪かったな。」

「なんなんだよマジ分かんねー」あれが夢じゃないってゆうのかよ、どうかしちまつてる。

そんなの信じられないに決ってるだろう！あんな怪物がいつもウロウロしてんのか、どう考えてもおかしいだろが！

バカみてえ、なに信じようとしちまつてるんだ俺！信じちまつたらホントに麻衣は…麻衣は…

「ヒヤヒヤヒヤ美味そうな奴見つけたぜ親びん！！」
「！」

う、嘘だそんな事あるはずない！これは夢だ、悪い夢だ！そ、そう
だそんな事があるはずない。

速く目覚めてくれ、速く速く速く速く速く

「おお、美味そうだな、サッソクいただくかギャハハハハハ」

速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く速く

『なにポケットと突っ立てるんだ、とっとと避かせ！』

「え？」

『「え？」じゃねえよ、速く避かせて言ってるんだ！』

そう『なにか』言われて恐る恐る後ろを振り返ったら目の前には像
の顔をした魚からトカゲの前足と馬の後ろ足をした怪物と4つの人
の影の様なものが襲いかかって来ていた。

「うわぁ」

ギリギリのところでなんとか避した。

「ほ、本当に夢じゃないのか」

『まだそんなこと言ってるのか、現実を決ってるだろ！じゃなきゃ
あんな怪物見えるはずないだろ』俺がいた場所は怪物達が衝突した
衝撃でへこんでいる。

『あいつら突っ込んだ勢いで身動きが出来てない、今だ！俺を掴め
！！』

今さらになるけど声の主の方へ振り向く、
その声の主は光の玉だった。

「お前はいったいなんなんだ？」『今はそんな事どおでもいいだろ、速くしないとあいつらが来るぞ！』

怪物達の方へ目を向ける、でっかくておっかない怪物はまだ腕がめり込んで動けないけど、人の影みたいな怪人はもう動けそうだ。

『速くしろ！今ならまだ間に合う』

影の怪人が手を剣だのチェーンソーだのおっかない物にしてこっちに襲いかかって来る

「ええーいこうなったらやけだ！」

勢いよく光の玉を握る

もふっ

…なにも起こらない

「おい、なんだよ！なにも起きないぞ！」

『……………』

握っている光の玉はなにも喋らない。

そうしている内にも影の怪人は刻一刻と近づいて来る。

「おい、答えろよ！どうしたんだってんだ！」

もうここまでののか？もし田沼の言っていることが本当だったら誰も俺が死んだことを知らずに俺はいなかったことになっちまうのかよ。嫌だ、そんなの嫌だ。

まだおじさんおばさんに恩返し出来てねえし、まだ母さんの墓参りにまともに行けてねえし、まだ麻衣を探し出せてねえし、まだ北条にも……………

「ちくしょおおおーー」

「ケケケケ、死ねええ」

カキーン

一瞬、時が止まったような気がした。

俺は生きていて握ってた光の玉は槍に変わっている。気付かない内

に俺はその槍で怪人の剣を防いでいた。

『存在適調完了。』

「なんだこいつ、なにをした？」

「おい、あいつ武器出したぞ。」

「本当だ、どこから出したんだろ？」

「なんかさっきより美味そうになってない？」

「！あいつまさか」

（多籍、まずはこいつを弾き反してみろ）

槍になった玉の声が頭の中に話かける。

俺は無言でやってみる

「うぎゃあああ〜」

ばったーん

「す、凄い！本当にこれが俺の力なのか！凄げえ」

「おい大丈夫か？」

「かなりふっ飛んだな〜」

「てかヤバくない？」

『驚くのも無理ないがあいつらをよく見てみる、きっともつと驚くぞ。』

「本当だ、どこでどうやって突けば良いか手に取るように分かる。」

「ちくしょー弟分の仇、とらせてもらうぞー」

「ええーいかっこいい武器持ちやがって、許さんぞー」

「親びんが出るまでもねえ、お前の相手は俺達で充分だー」

「おいコラ、俺を死んだままにしていくなー覚悟しろー」

いつでも本気でダッシュ出来るように姿勢を低くする。

今だー！！

「ウギヤア」

「ゲフォ」

「ブハウア」

「ピィアエ」

急所を突かれた怪人達は煙の様に消えた。

確かに突いた感覚はあるのだが、なんか砂のような物を突いた感覚
しかなく、とても実感が無い。

そもそも俺は何に対して実感を持つと思うてるんだ？

『気を付けろ、まだ一番強い奴が残ってるぞ。』

俺が怪人と戦ってる間にも手出しせずただ見ていただけの怪物、
人の影のような怪人はあんまり強くなかったからあっさり勝てたも
のあの怪物はそうもいかない、その理由に……

「…………ツチ」

まったく隙がない。

ズリ…

向こうが隙を作ることなく距離を詰める

スッ…

こちらも隙を作らないように槍が届く距離まで近づく、すると

ヒュッ

「！」

ガッ

怪物の鼻が伸びて向こうの先制攻撃、うしろに下がって避わした所
を続けて鱗攻撃

カキン、キン、キンキン、キン

「そこだ！」

「おっとお」

隙を見て槍の届く範囲に突っ込み一突き、そのまま肉弾戦へ

「オラァ」

「よっはあっ」

「とっフン！」

「くっ、たあ」

「ぐヌウ」

「まだまだあ」

「甘い!!」

「ヤベッ、しまっ…」

「グフフフ……」

隙を突かれ足で押し潰されそうになったところを槍で防ぐ

「オラオラ、とっとと潰れちまえよ。オラオラ」「くっ……」

このままじゃ押し潰されるか槍が折れるかのどちらかだ、どうすれば……

『1つこの状況から逆転できる方法がある。』

「それはいいたい」

『これはとても危険な賭けだ、成功する確率は低いし失敗したら確実に死ぬ。』

「こんな状況だ、手段なんて選んでらんねえよ。」

『分かった、指示ど通りに動いてくれ。』

「分かった」

『足に意識を集中させるんだ、力じゃなく意識、心をだ。今のお前なら出来るはずだ。』

流石に体を支えつつ足のことを考えるのは楽ではなかったがなんとか出来た。

『今度は足にあるそれを腕と俺に回すんだ、そして……』

「弾く!!」

「グオオこ、こいついつの間に」『次はその足で蹴り飛ばせ!!』

「うおおおー」

「グオオオオ」

『そして……』

「『叩っ斬る』」

「グオオオガアアアギャアア」ドサツ

バタッ

（よし、賭けは成功だ、あいつは極度のダメージで動けない、チャンスは今だ!）

「ううう」

『どうしたんだ?』

「駄目だ、力の使いすぎで体が動かない。」

「グゥ……例え……どんなに……弱くと……も、平界者……だけは……どんな手を使ってもお」

『くっまだあれだけの力が残ってるのか』

（万事休すだ、どうすれば……）

「しいねえー……」

「北条……」

「解限」

バシンッ

一瞬自分の目を疑った、俺と怪物の間に一瞬で潜り込み一瞬で怪物の攻撃を弾き一瞬で怪物の膝をつかせた人物、そいつは……

「お前、何者だ!」

「『何者だ!』か、いいだろう、多籍に自己紹介するついでだ、貴様にも教えてやる。」

我が名はクラウド、 S4C部隊長クラウド・ゼロ・プリュニユー
ト通称、雲だ!

「田沼だった。」

「お前が噂の蜘蛛だと……」

「ッだーかーらー何度俺に言わせる!俺は雲だ!足が8本ある方の蜘蛛じゃない!俺はお空を見たらたまにいる雲だ!」

「別にそんなこだわる所じゃなくね?」

「疲れてる割にはツツコミ出来るんだな。つーか何言ってるんだ、ここでこだわらなくてどこでこだわらなくちゃいけないんだ?ここでのしかこだわれないだろうが。」

（こいつが今の……）

「ええい、面倒なことになったが二人まとめて死ねえええ」

「あー、とりあえずは消えろ、」

また一瞬だ、あの怪物のいた場所には何一つ残ってない。

『貴方は……………』

「言うな、色々ややこしくなる。まあなんだ、聞きたい事だらけだが詳しい事は明日、TPOも踏まえてな。」

「1つだけ聞かせてくれ、お前は一体なんなんだ？」

「…………人の話ぐらい聞いておけよ。そろそろ赤謝さん達が到着する頃だ、俺はこの後用事があるからここまでだ、じゃあな、また明日。」

そう言って指をパチンと鳴らすといつかあったか分からない違和感がなくなった。

その後俺のあとを追って来た北条達と合流した。

北条が色々と話かけてきたが話を聞ける気分にはなれなかった。

「それじゃーねー」

北条と別れる。赤謝と二人きり、いつもも会話がないが今日は今までに比べようがないほど会話がなかった。

（それもそうか）

自分の祖父が殺されたんだ、ショックを受けるのも当然だ、俺達の前では必死に笑顔を作ってるけど、無茶をしてるのは隠しきれてない。

そう考えてる内に別れ道についた。

「…………それじゃあね。」

「あ、ああじゃあな」

俺も頭の中を整理しなきゃな。

「よっつ」

集合時間ギリギリまでゲームをやり込んだ後、猛ダッシュでいつもの会議場につく。

「うっし、17時5秒前っ」

コンコンとドアを叩くのに2秒、ドアを開けるのに3秒使いジャスト5時

「失礼しまーす」

「お、来た来た」

「17時ちょうどだな、よろしい。」

いつものメンツ、いつもの雰囲気

「大会議場へ移りますか？」

そしてこれから話す浮いた話

「…了解した。」

忙しくなりそうだ。

「例の新人についての話です。」『……………』

「今日3人の内の1人の覚醒に成功しました。属性が風と思われる男です。その者の武器がインテリジェンスアイテム、しかも素がS3級と思われる槍でした。」

「とんだ掘り出し物になったな。」

「ええ、しかし問題はこちらではありません。その者は初めての戦闘にも関わらずメガクラスと同等に戦っていました、ノンクラスに限っては一撃で仕留めています。」

「……さてよ、お前の調査判断資料ではそいつの素質は…」

「はい、最下位と判断しました。それは今でも変わりません。」

……………

「やったじゃない!!」

少しKYな発言

「これで少しすれば仕事も減るわ、これでデートしまくりよアナタ」

「こらこら、私も嬉しいが少し静かにしなさい。」

「彼らは今どうなっている？」

「今は風分身を6人がかりで警備に当たらせています。」

「良い気分だ、俺達に何か出来る事はあるか？」

「例の計画の調査を強化して下さい、もしその計画が実際にあったとしてそれが第2、第3と進んだら大変です。」

「了解した、他に話がある者は？」

……………

「ではこれにて会議を終了とする。」

スタッ

「ふう」

結構夜まで仕事をしたから家が懐かしく感じる。

ガチャ

とつと風呂に入り色々と済ませてベッドに横になる
ゴロン…

「フッ……暫くは忙しくなりそうだな、ナハハ」

第四話 「歪みシリーズはここ

までつつーことで」(後書き)

どうも作者のヌマツチです。このたびは投稿が遅れた分長めに作りました。自分は良い出来だと思っているのですが皆様はどうでしたか? そう思う方もそう思わない方もこれからどんどん面白くなるよう努力しますので今後もよろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5225f/>

天下夢争

2011年1月7日02時59分発行